

研究ノート

新任保育士の保育技術向上に向けての取り組みについての一考察 — 新任保育士からのアンケートを中心に —

A consideration of nursery teacher newly employed to improve nature of child care
— Investigation centering on the questionnaire from a nursery teacher newly employed —

松尾 寛子

要約：本研究は、新任保育士が、さまざまな業務に追われている現実から、保育士として着任する際に身につけておくべき事柄を、〈技術的側面〉〈精神的側面〉〈知識的側面〉〈対人関係的側面〉に分類し、新任保育士からみた、保育士養成校時代に取り組む内容について考察したものである。

新任保育士に対するアンケート調査から、学生に保育士の仕事の実態を伝えていくこと、実習生の時とはまた違った責任感がともなうということも再度認識できるような指導が必要なことが明らかになった。また、新任保育士の課題については、子どもとのかかわりを円滑にできるような技術を身につけるかが求められていることが見えてきた。

Key Words： 新任保育士 保育技術、保育士養成校

1. 問題と目的

近年、保育の施策がめまぐるしく変化してきている。保育士資格が「国家資格」となり、その社会的地位の向上を発信する一方、未だ保育士の給与増にはつながりにくく、「やりたい仕事」と「続けられる仕事」の格差はあるように感じられる。一方では保育所保育指針の改訂なども相まって、保育界においては大きな変革の時期に来ているともいえる。

子ども・子育て応援プランでは、少子化対策基本法や次世代育成支援対策推進法に基づき、2009年度末までに11時間の開所時間を越える延長保育の実施、休日保育、夜間保育、地域子育て支援センターなど、目標値を定め、各自治体も少子化対策や子育て支援に対する行動計画を策定し、計画的な実施にあたってきた。これらの施策からみても、乳幼児や子育て家庭に対するあらゆる支援をサービスとして提供する保育所や保育士が担う役割は多く、求められる資質は年々高まっているように思われる。

また、保育士に対する保護者からのニーズも高く、改訂された保育所保育指針では、第6章に「保護者に対する支援」が盛り込まれ、専門性を生かした子育て支援の

役割を担うことが示されている。これらのことから、各保育所・保育士への負担増が明らかである。

子どもとかわる仕事を望み、保育士養成校に入学してくる学生については、大学全入時代といわれている昨今、学生も多様化してきている。

これらのことから、本研究では、保育士として働くために、必要な準備がどの程度なされているのか、就職内定したあとから、実際どのような準備を学生が行っているのかを探り、保育士養成校において、各保育所の特性を探りつつ、新任保育士が学生時代にどのようなことをしなければならないと感じているのかを調査し、就職内定した学生には保育士養成校として具体的にどのような準備をしておくことをすすめていくべきかを検討することを目的とした。また、保育士養成校の学生に求められる保育士としての就業意識や、新任保育士としての自覚を、どのような形でどの程度高めていかねばならないのかを調査し、保育士の資質改善のために学内における保育実習指導のカリキュラムの充実や、実践プログラム作りを最終目的としたい。

2. 先行研究概観

本研究を進めるにあたり、学生が保育士養成校時代に学んだことや取り組むべき内容を考察するために、新任

保育士に限定した調査や報告についての先行研究は、木戸(2002)¹が行ったアンケート調査より、新任保育士にとって、大学で学んだことが実際の保育に役立つのは、乳児保育、ピアノ、保育実習、表現、小児保健、音楽、の順であると答えていることが明らかになっている。また、実習や採用試験時には、演奏技術が求められているが、現場の0・1・2歳児では保育士の歌う声やわらべ歌が多いことを挙げている。さらに、子育て支援に関しては、何らかの支援に関して新任保育士の全員がかかわっていると答えている。

成田(2007)によると、「保育所への期待がますます増大する今日、保育や子育て支援の中心的な担い手である保育者は、多大な職務を遂行しなければならない。そのためには、一人一人の保育者のみの力には当然限界があるはずで、まわりの有形無形の資源を活用することになるだろう。このような保育者を様々な方法でサポートすることは、我々保育者養成教員にも課せられた役割であろう」「近い将来、保育や子育て支援の中心的な担い手になるであろう質の高い保育者を養成することは、我々保育者養成校教員に課せられた役割である」²と述べている。

また、三好ら(2006)によると、「保育士の資質を改善するには、保育士養成校の保育士養成と現職研修とがつながっていることが重要である」³とある。

3. 研究対象と研究方法

調査対象：2007年3月にA市内にある保育士養成校(B校)を卒業したあと、2007年4月から認可保育所で保育士として就職した保育士8名を対象とした。対象は、筆者がB校で1年間担任をした学生である。調査は無記名で実施した。

調査時期：2007年4月

調査項目：性別、年齢、卒業年、研修の有無、研修期間、研修内容(入ったクラスなど)、研修後の気持ち、卒業までに身につけなければならないこと、保育士として働くための準備、不安に感じていることなど、10項目にわたりアンケートを実施した。

なお、アンケート作成に際し、保育現場で働く保育士C(2007年3月にB校を卒業した新任保育士)の意見を参考にしながら作成した。

4. 結果と考察

(1) 新任保育士が身につけておくべき事柄

〈技術的側面〉

保育士からのアンケート結果によると、「きれいな字が書けて漢字を知っていれば恥ずかしい思いをせずにすむ」「書き物がたくさんあるので、それに負けないように練習で書くのがよい」「手遊びや園外での遊び」「季節の歌や遊び」「学校で学んだことは全て大事」「子どもとかわる時に『これは得意だ』と自信のあるもの、何でもいいから磨く」「子どもの安全を最優先に考えられる判断力」「子どもの注意を引き付けるための手遊びや話など」「子どもの様子がよく見える立ち位置」「ピアノ」などが挙げられた。

これらのアンケート結果より、まず保育士の特性を活かしたスキル向上を保育士養成校時代に培うことが大切であると思われる。保育士養成校で学んだ技術が、即実践で求められるということ、また、日々の努力が必要なものと練習によって上達する側面であるため、単に単位修得のための技術ではないということや、単位修得後も各自で練習することが必要であることを学生に認識させなければならない。

〈精神的側面〉

保育所における研修形態について、内定後まもなくより定期的に研修を課すところ、行事のみの参加を学生に促すところ、保育士養成校における最終学年の定期テスト終了後の2～3月よりボランティアとして研修が始まるところ、有給で研修があるところ、研修はなく4月より保育士として勤務するところなど、保育所によりさまざまである。

また、研修中においても、研修内容はさまざまであり、保育士の補助的役割を担い保育を行う、朝の会・帰りの会などを担当する、掃除、着脱・排泄・食事などの援助、午睡の前の絵本読みなどを担当するなど、部分的な保育を担当することもあれば、保育士の補助として担当することもある。

新任保育士からは、「責任感」「向上心」「諦めない気持ち」「謙虚な姿勢」「感謝の気持ち」などが挙げられた。

比較的小規模な既存の人間関係の中に入るとということ、保育士に求められる業務の多さ、これらが保育所での就職の特徴であるように思われる。新任保育士に求められる人間像は、謙虚な姿勢で、仕事は手際よく、かつコツコツと何事にも取り組む姿勢が求められるのではないだろうか。

〈知識的側面〉

保育所での保育形態は各保育所ごとに様々であり、新任保育士がどのような配属になるか、また、担当する年齢も保育所により異なる。例えば、新任保育士はフリー保育士として配属され、担当クラスを持たない場合もあれば、副担任という形で配属される場合もある。また、クラスを1人で担当することもある。さらに、学生が“〇歳児クラスに配属”ということを知ること、内定後いつの段階に知るのかも、保育所によりことなるため、保育の準備も十分でないうちに、子どもの保育をスタートすることもある。

アンケート結果では「どの年齢の子どもでも対応できるように各年齢の発達や遊びを身につけておくとよい」「各年齢の発達課題を把握しておかなくてはならない」「各年齢の発達をしっかりと把握しておくこと」が挙げられていたが、特に、各年齢の発達段階の把握については3名の保育士が必要であると回答していた。

発達段階の把握については、各保育士養成校で乳児保育や発達心理学等で修得済みではあるが、知識として学んだことを保育現場でフィードバックさせて、子どもの姿としてとらえることについての訓練が必要であると思われる。発達段階については、子どもとのかかわり経験を積むことにより、獲得しやすくなるものであるため、保育士養成校時代より、子どもとのかかわりを持つ経験が必要である。

保育士として働くためには乳幼児に対する各年齢の発達段階については、しっかりと押さえておき、その発達段階に応じたあそびや歌を提供することが求められるのではないだろうか。適切な判断力をもって、乳幼児とかわるために必要な基礎的学習は、保育士養成校時代に身につけておかなければならない。

〈対人関係的側面〉

アンケート結果より「保護者に対しての話術」「挨拶や言葉遣い」「素直に受け入れる心と、怒られてもそれが次につながるんだと思えるプラス思考」「人間関係」などが挙げられた。

円滑な対人関係について、コミュニケーションスキルは保育士のみならず、社会人としても求められることのひとつである。子どもとのコミュニケーションを念頭におくならば、保育士は乳幼児が見たこと感じたことを、乳幼児の感性を持ち合わせて共に共感することが必要であり、乳幼児に伝わる言語を使用したり、さらに身振り手

振りで伝えることもある。判断力については、子どものことをよく観察し、子どもを理解しようとする気持ちや、経験にも大きく左右される。タイミングよく言葉をかけることがいかに大切かは、現職保育士や保育を学ぶ学生は周知のことである。日頃から様々なものを見て感じ、それを言葉で表現し、相手に伝えることが求められる。

また乳幼児や他の保育士とコミュニケーションだけではなく、保護者との円滑なコミュニケーションが図れることも不可欠であるということを新任保育士は挙げている。

これらの結果より、保育士養成校では学生に保育士の仕事の実態を伝えていくことが求められるのではないかと考える。学生は実習を経験し、保育士の多様な業務内容については一定の理解を示しているが、実習生の時とはまた違った責任感がともなうということも再度認識できるような指導をしていかなければならない。

(2) 新任保育士の課題

保育士養成校に在籍する学生が、実習中に経験した中で一番大変だったことは、乳幼児と遊ぶことでも設定保育をすることでもなく、日々の実習記録が大変だったという学生が多い。保育を実践した後、その保育を振り返り、記録に残すということは、実践したことを客観的に見る第一歩であり、保育中に気づかなかったことや無意識で行ってきたことなどを改めて気づくよい機会である。筆者も新任保育士のころは、毎日の記録の多さに手が慣れず、業務時間中に書き終えることはできなかったが、記録をとることにより、乳幼児の中長期的な発達課題が見えてくることもあった。記録をとることにより、乳幼児の発達に視点をあてたり、保育士の保育に視点をあてたりしながら保育を省察することができる。保育所では集団での保育を行っているとはいえ、一人ひとりの乳幼児や保護者にとっては人生のうちにかかわる人的環境の一部であり、乳幼児や保護者との一対一のかかわりを無視して保育はできない。それゆえ保育はアナログ的な作業が多く、保育士の業務が煩雑で多くなるとも考えられる。しかし、これは新任保育士にもベテラン保育士にも同様の業務が課せられることがあるために、新任保育士としての課題としては、保育士として身につけていなければならない知識は学生時代に押さえておくこと、保育士養成校時代にいかんして子どもとのかかわりを円滑にできるような技術を身につけるかが求められてい

る。

また、保育士養成校の卒業生の中には、着任数日で退職したり、2～3月の研修期間中に退職（辞退）したり、着任1年目の8月末で退職したりなど、早期離職をする者もいるのが現状である。このように子どもとのかかわりを持つ上で、保育所の実態（業務量の繁雑さと多さなど）をある程度把握した上で、就職するということへの学生の認識が必要であると思われる。

したがって、保育士養成校時代には保育ボランティア経験を多く積み、即戦力となることが新任保育士になる者に求められている課題であろう。

5. まとめ

保育の現状は変化を遂げている。しかし保育実践現場における保育士による保育は、各保育所の方針により保育内容にある程度の方向性はあると思われるが、一人ひとりの保育士が子どもの育ちを願うという思いには大差は無いのではないだろうか。保育において、子どもに対してどのような場面でどのような言葉をかけるのかというのは、保育士の感性によるところが大きい。保育士とは、児童福祉法によると、「専門的知識及び技術を持って、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導をおこなうことを業とするもの」と定められている。保育を行う技術は当然のことながら存在するにもかかわらず、新任保育士と保育経験年数の長い保育士との間に、保育士という業務そのものに差があるわけではない。したがって、新任保育士は学生時代に経験した実習や授業内でのありとあらゆる技術を思い起こしながら、さらに、現場で働く先輩保育士の保育からたくさんを学び、自らの保育を確立していくのである。つまり、保育士の資格を取得し、保育士として働くためには、ある一定の保育水準を保てるよう、保育技術を身につけているものとみなされ、保育士資格取得後に自らの保育水準の低下や保育内容の後退があってはならないのである。子どもの豊かな感性に応えるべく、保育士もまた豊かな感性を持って子どもにかかわらなければならない。

保育の質は保育所によって千差万別であり、子どもの成長とともに保育士としても育っていつているものと思われる。特に、毎年4月になると多くの保育所で新任保育士が誕生し、日々の保育や保護者との関係、他の保育士との関係、記録の書き方等、様々な不安を抱えながら保育士としてのスタートをきるのである。保育士養成校を卒業し、保育所や施設に就職していく新任保育士は毎

年数多くいる中で、保育士として求められる子どもの保育、保護者への対応、子育て支援など、保育に関するあらゆる面において、新任ゆえに直面する多くのとまどいの声を聞くことがある。学生時代におけるおおむね30日間という実習体験は決して多くはないが、限られた期間の中での実習は、保育現場から多くのことを学び、さらなる保育への期待を膨らませたり、あるいは自分にもできるのだろうかと不安になり、決意を新たにすよい経験になるようである。この実習体験や保育士養成校での保育士として必要な知識や技術を獲得させるカリキュラムの中で、保育士として必要な保育技術を身につけていくのである。

実習先で子どもと触れ合う経験は、学生にとって貴重なものであり、実習後の学習意欲にも大きく影響を与える。そのようにして実習を経験してきたにもかかわらず、保育士の仕事の内容を実習ですべて網羅できるかといえばそうではない。実習時期が4月ならば4月の子どもの様子・保育士の仕事は目の当たりにすることはできるが、それ以外の実習時期ならば、保育士が4月当初どのようなことで苦勞するのかが見えてこないことが多く、‘どの時期’に‘何の行事’で忙しいのかは、実際保育士になってみないと見えてこないことも数多くあるのではないだろうか。

保育士にとって保育の準備は手抜きがあってはならないものであると考える。子どものその後の発達に大きな影響を与える乳幼児期だけに、かかわる保育士は子どもの能力を最大限に生かせるよう、保育にも工夫が必要であるし、日々の研鑽が何より求められるものである。保育士にとっての保育は1年間が過ぎればまた同じように1年間が巡ってくるが、子どもには取り返しのつかない、その時限りの大切な時期なのである。そのことを踏まえ、保育をしていかなければならない。

そのためにも様々な研修に出かけ、必要な知識を獲得することはもちろんのこと、保育技術向上に向けて、努力が必要であり、保育士に向けた保育実践の研修も数多くある。それらに積極的に参加し、「この先生に保育してもらいたい」と思われるような保育士を目指していくことが必要なのだと考える。

保育士養成校では、保育士資格を取得する学生に、そのような認識が持てるように指導していくことが求められているように思う。

また親が安心して子どもを保育士に託すことができるように、今日の子どもを取り巻く多様な社会問題につい

て、保育所・幼稚園などの保育現場と保護者、地域社会との連携を図りつつ、地域社会での子どもの育ちについて保育士自身が研究心・探究心を持って保育に臨めるよう、保育士養成校では実践研究者の育成に力を注いでいくことにより、保育の質を高めていくことができるのではないかと考える。

学生時代に経験する保育実習の前にはパネルシアターやエプロンシアター、絵本や導入に必要な人形など、何らかの保育の準備をしていく学生が多い。しかしながら、保育士として働きはじめたら、準備をする時間すら取りにくいほど、毎日の保育が複雑かつ多様化している。何ごとにおいてもプロだから準備はしなくてよい、というものではない。プロだからこそ入念な準備は必要なのである。保育士として働きはじめると、実習生のときのようない事前準備は難しくても、行き当たりばったりの保育にならないためには、事前準備は必要なのである。保育士として働き始めたら、保育の準備時間が取りにくいということがあらかじめ分かっておれば、保育所への就職内定後に少しずつ準備をはじめておけば、準備時間不足は少しは緩和されるのではないかと考える。必要な知識を獲得することはもちろんのこと、保育技術向上に向けての努力が必要であり、保育士養成校在学中には乳幼児に関する基礎的な学習はもちろんのこと、保育士として必要な保育技術を身につける努力と保育士の仕事の実態を把握していくことが求められることがアンケート結果より見えてきた。そのためにも保育士養成校では、新任保育士のためのプログラム作りが、早急に求められるということが言えるのではないだろうか。

謝辞

本研究のアンケート作成にご協力いただきました、平林大佑先生には心よりお礼申し上げます。

引用文献

- 1 木戸由子 吉富真佐子 2002 卒業後の新任保育士の意識に関する研究 日本保育学会大会研究論文集 55 360-361
- 2 成田朋子 2007 子どもの現状と次世代育成について II 名古屋柳城短期大学研究紀要 29 72
- 3 三好年江・石橋由美 2006 初任保育士の担当クラスと子どもの遊びにかかわるときの問題意識からみた保育士養成校の課題 新見公立短期大学紀要 27 111-116

参考文献

- ・今堀美樹 2002 保育ソーシャルワーク研究：保育士の専門性をめぐる保育内容と援助技術の問題から 神学と人文 大阪キリスト教短期大学
- ・伊藤利恵 2007 福祉専門職としての保育士における「価値」の位置づけ-専門性の要件の検討から 健康福祉研究 高崎健康福祉大学総合福祉研究所
- ・川池智子 2008 保育士の「子育て支援」にかかわる専門性とリカレント教育(その1) 山梨県内の保育士への調査結果をてがかりとして 山梨県立大学人間福祉学部紀要 山梨県立大学
- ・北野久美 2006 実践レポート 実践のなかからみえてきたもの、保育所・保育士がめざすもの(特集 今、福祉現場に求められる専門性) 月刊福祉 全国社会福祉協議会
- ・松永しのぶ・坪井寿子・田中奈緒子・伊藤嘉奈子 2002 保育実習が学生の子ども観、保育士観におよぼす影響 鎌倉女子大学紀要 鎌倉女子大学
- ・三好年江・石橋由美 2006 初任保育士の担当クラスと子どもの遊びにかかわるときの問題意識からみた保育士養成校の課題 新見公立短期大学紀要 27 111~116
- ・中坪史典 2006 はじめての接続 めざせ保育士・幼稚園教諭!-いま、保育士に求められる三つの専門性(チカラ) ひつじ書房
- ・岡本和子・矢藤誠慈郎・諏訪英広 他 2003 保育士養成の再検討(3) 保育士養成課程のカリキュラム改正と保育士の専門性 岡山県立大学短期大学部研究紀要 岡山県立大学短期大学部
- ・大阪千代田短期大学幼児教育科教職員集団調査報告 2002 障害児保育に対応できる保育士養成に向けてのアンケート調査 結果報告書 大阪千代田短期大学紀要 大阪千代田短期大学
- ・大嶋恭二 2008 保育士の専門性と養成の課題 東洋英和大学院紀要 東洋英和女学院大学大学院
- ・齋藤知子 2008 保育所における子ども家庭支援に求められる保育士の専門性について 白梅学園大学・短期大学紀要 白梅学園大学
- ・高橋哲郎・元田幸代 2005 幼児教育現場への適応を促す実践的保育士養成の教育プログラム:理論と実践の統合 精華女子短期大学研究紀要 精華女子短期大学

